【研究ノート】

イギリスの就学前・小学校音楽教科書における音楽理解の構造

― 発達の観点からの *Kickstart Music*（2021）の分析 ―

小松原　祥子

（神戸女子短期大学）

１．本研究の目的と方法

（１）研究の目的

本稿では、イギリス（イングランド）の就学前から小学校段階の音楽教科書の一つである *Kickstart Music* 2021年改訂版を対象とし、就学前（3－5歳）の「聴取・リズム・歌唱・探求・創作」、小学校KS1（5－7歳）・KS2（7－11歳）の「聴取・リズム・音程・音と創造力」の単元を通して音楽理解を深める構造を明らかにすることを目的とする。ここでの構造とは、教科を統一し特色あるものにする、相互に関連した概念の核心（Bruner, 1961）を意味する。対象テキストの選定理由としては、理念として発達の構造が明確に意識されていることであり、分析の観点としてはスワニックとティルマン（Swanwick, K. & Tillman, J. 1986）による「発達のスパイラル（The developmental Spiral）」を用いる。

「音楽理解」については、これまで様々な立場から定義付けが試みられており、木村（2007）の場合、「演奏指導の場において、子どもが指導者とのかかわりの中で共有し、獲得する音楽的な気づき・学びの数々」を「音楽理解」と呼んでいる（木村 2007, p.2）。本稿では、レッスンという音楽の専門教育として歌唱や演奏、作曲の技能を高めることだけを目指すだけではなく、一般教育として「聴取・リズム・歌唱/音程・探求・創作/音と創造力」の単元を通して木村（2007）の言う音楽的な「気づき・学び」を包括的に深めることを「音楽理解」とする。ここではレッスンのような教師－生徒の1対1の関係だけでなく、様々な発達段階にある子ども同士の関わり合いによる「気づき・学び」を含む。

音楽教育において「発達」とは、高須（2001）によれば「音楽に関わる量的変化及び質的変化」であり、量的変化とは「身体的な成長に伴う技能の発達や声域の変化、知識の獲得など」を指し、質的変化とは「子どもの内面的な成熟や学びの構造の変化、表現力など」を指す。音楽的発達研究では、主に乳幼児期を中心に子どもの行為そのものを対象とするものが多い。その中でもイギリスにおける音楽教育学研究者による幼児から初等・中等教育段階まで見通した発達過程を構築した研究として、スワニックとティルマンが挙げられる。彼らの研究は、子どもの創作から音楽的発達の系統性を理論化しようとするものであり、主としてピアジェ（Piajet, J.）及びブルーナー（Bruner, J. S.）の理論を援用し、授業を通じて収集した子ども達の作品を分析することで、「音楽的発達の螺旋状過程」（Swanwick and Tilman,1986）として発達の８つのモードの特質

を示している。

音楽教科書の先行研究では、外国の教科書に関するものとして、尾見（2012）はハンガリーの音楽教科書における読譜力の育成に着目しており、8年間の教育内容の体系と、読譜の位置づけを示しており、読譜の技能を育むための段階と方法論を示唆している。背景となる文化に着目したものとして、川村（2011）は、多文化音楽教育と他教科との連携に着目し、全米芸術教育標準に基づいて編集されている米国の代表的な音楽教科書*Making Music*（2008）を取り上げ、他教科との関連学習の概要を例示している。これらの研究は各国の教科書の特色を明示するものではあるが、子どもの成長に伴い、段階的に進めていく背景となる発達理論の分析は行われていない。そのため、他国においても応用可能な活動の背景となる原理が示されず、日本での活動の示唆を得ることが難しい。また、就学前のテキストは対象とされていない。

従って本稿では、対象とするイギリスの音楽教育学者スワニックとティルマンによる発達理論を、就学前から小学校段階を通したイギリスの音楽教科書の単元が成り立つ背景として分析することで、日本への示唆となり得るカリキュラムの構造を見出す。

（2）イギリスの就学前・初等音楽カリキュラムと先行研究の検討

イギリスの就学前教育のシステムとしては、就学前教育施設及び個人の保育者に義務付けられている統一した法令カリキュラムEarly Years Foundation Stage（以下EYFS）が2008年に導入され、最新版では2021年に改訂が行われている（Department for Education, 2021）。小学校以上では1992年より音楽科ナショナル・カリキュラム（Music in the National Curriculum、以下MNC）が導入された。

EYFSの教育プログラムのガイダンスとして、音楽に関しては2018年に『音楽的発達に関する課題（2018）』（Burke,N., 2018）が提示され、月齢に即した音楽的学びと環境構成が示された。鈴木（2018）はこの2018年版におけるEYFS「人間としての個人的社会的感情的発達」との関連性に着目している。2021年には『発達の課題』（2021）の「表現芸術及びデザイン」の中に0－3歳、3－4歳、レセプションクラスの段階ごとに「子ども達が学ぶであろうこと」「支援の例」がよりシンプルに示された（Department for Education, Rivised July 2021）。

藤掛・北野・三村（2014）はEYFS2012年版と小学校MNC1999年版を検討し、就学前に子ども達が主体となる遊びを通して想像や情景のイメージをもとに音を知覚・感受する経験を土台として、小学校での具体的な音楽的要素や音の知覚・感受を学修する内容へと繋がっていく傾向を示している。鈴木（2017）はイギリスの音楽教科書キーステージ（以下KS）1（小学校低学年5－7歳）のクロスカリキュラムの観点と教科としての音楽について論じているが、就学前から小学校修了段階のKS 2（7-11歳）を通したテキスト内容の発展性については分析されていない。

小松原（2023）は、EYFS2021及びガイダンスの音楽領域において音楽の要素に着目する視点や音楽史の観点が示される等MNCとの繋がりを踏まえ、就学前段階の音楽テキスト*EARLY YEARS FOUNDATION STAGE*（*AGES* 3-5）（2021）及び小学校KS1段階の音楽テキスト*Kick-start Music 1*（*5-7yrs*）（2021）を対象とし、ピッチマッチの支援、音楽の要素を通して創作・身体表現・楽器遊び、多文化の楽曲構造を聴き、創作し、身体表現と組み合わせることでその仕組みを体感する、といった特徴を示した。

EYFS2021年版カリキュラムガイダンス「表現芸術とデザイン」の音楽領域では、全ての年齢段階で音楽の諸要素を通して音の知覚・感受を促す援助の視点が示されている（Department for Education, 2021, p.124）。また、MNC（2013）のKS1, KS2の「ねらい」には「偉大な作曲家や音楽家の作品を含む、さまざまな歴史的時代、ジャンル、スタイル、伝統にわたる音楽を演奏し、聴き、レビューし、評価する」「歌い、声を使い、自分自身や他の人と音楽を作り、作曲することを学び、楽器を学び、テクノロジーを適切に使いこなし、優れた音楽の次のレベルに進む機会を持つ」、「音楽がどのように作られ、生み出され、伝達されるかを、相互に関連する面（音程、音長、強弱、テンポ、音色、テクスチュア、構造、適切な楽譜）を通して理解し、探求する」（Department for Education, 2013）、と記されており、多様な文化と時代の演奏（歌唱）・作曲・聴取及び評価によりICTを用いながら音楽の要素を通して音楽理解を深める姿勢が顕著である。

（3）スワニックとティルマンによる音楽的発達のスパイラル

イギリスにおける音楽的発達に関する研究で子どもの創作から音楽的発達の系統性を理論化したものとして、図1のスワニックとティルマンによる発達のスパイラルが挙げられる。近年もボイスーティルマンとアンダーソン（Boyce-Tillman, J. and Anderson, A.,2022）やフィルポット（Philpott, C.,2022）等で議論の対象となり、スワニック自身も改めて検討している（Swanwick, K.2022）。

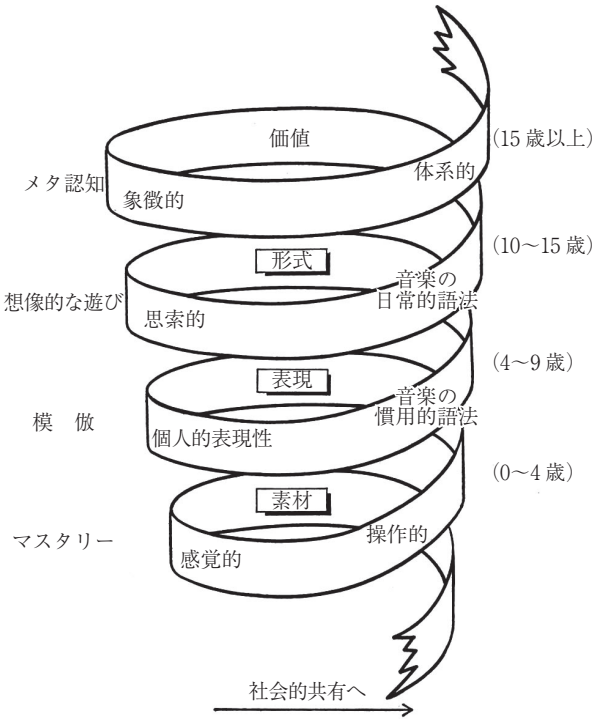
この研究に対する主な批判的視点としては、次の3点が挙げられる。第一に、ハーグリーブス（Hargreaves, D. J. 1992）による、実際の授業分析に基づいて帰納的に構築されたものではなく、理論が先行しそれに分析結果が加味されたものであるというもの、第二に、子どもたちの創作というきわめて個性的な対象を個別に記述する一方で、普遍的な理論への展開過程で数量化を試みているという、性質の異なる2つの分析方法の併用の妥当性を問うもの（今川, 1997）、第三に、主としてピアジェ理論に基づいて構築されているため、子どもの社会化される過程（社会的共有）及びその契機を明らかにしていない（高須, 1998）といった観点である。これらの主張は音楽的発達の普遍性・妥当性の観点としては本質的な指摘であるが、日本においてもこの発達のスパイラルを援用した研究が数多くあり、（竹井、1995他）一定の法則性を示している。また、本稿で対象とする「教科書の題材の発展的構造」を考えた場合、社会的共有は題材を通して教師が活用して行うものであり、そもそもの題材構成の在り方としてこのような概念を軸とした発展性を援用することで、2021年改訂版においてもこのモデルが通用し得るかを改めて検討する価値がある。

（4）分析対象テキストの理念

本稿で取り上げる音楽教科書*Kickstart Music*序論部分ではMNCに関する下記のような記述がある。

> 現在のナショナル・カリキュラムでは、初等教育段階のすべての子どもたちが音楽体験をする権利があることを認めている。この権利の実現は、カリキュラムの他のすべての分野でそうであるように、音楽の専門家でない教師の自信にかかっている。従ってこの本は、一般の教師をサポートするために、以下のような形で作成された。

図１　スワニックとティルマンによる発達のスパイラル



（出典：Swanwick and Tilman,1986. 野波健彦他訳）

- 達成可能な発達の構造を提供する
- 教師が自信を深めていく過程で、さらに発展させることができる活動の概要を提供する。
- 音楽の目的を明確にし、音楽活動の根底にある原理を教師が理解できるようにする。

（Paterson, A. and Wheway, D. 2021a, p.3.）

このように、一般の教師でも「発達の構造」を提供できる構成を取っている。

Kickstart Music 全体の単元構成は、就学前（3－5歳）は「聴取・リズム・動き・歌唱・探求・創作」、初等教育KS1（5－7歳）・KS2（7－11歳）は「聴取・リズム・動き・音程・音と創造力」であるが、スワニック＆ティルマンの発達のスパイラル（図１）に「動き」は含まれていないため、本稿では「動き」以外の単元を対象とし、次々頁の表１に目的を示す。

ここから、低年齢から高学年に向かう各単元の発展性を見ると、図１のような音素材→表現→形式へと音楽理解が深まる傾向が読み取れる。特に就学前の「探求・創作」から「音と創造力」の単元で顕著であり、スワニックの螺旋図が子どもの作曲作品を対象としていたことが一因であると考えられる。その他の単元でも、聴取・リズム・歌唱・音程それぞれの「目的」を達成することにより創作の基礎的技能を積み上げているという見方が可能である。

２．テキスト分析結果：就学前から小学校を通した音楽理解の構造

ここでは「聴取」との結びつきをより明確に分析するため、特定の楽曲を用いて聴取を行っている活動を事例とする。

（１）「聴取」単元における音楽理解

小学校最高学年のKS2（9－11歳）では、下記のように「聴取」単元の「録音と聴取」において、これまでの聴取活動の集大成のように子ども達の作曲作品の演奏の録音とその聴取が、下記のような観点で行われる。

KS2：9-11歳　「聴取」の活動を通した「作曲」「演奏」「聴取」による「形式」の理解

【録音と聴取】

ねらい：子どもたちの作品の記録を学習活動として活用する。

1．このアクティビティには、子供たちの作曲した曲のオーディオ録音、または曲の演奏が必要である。

　作品が演奏された状況について話す。タイトルと、必要であれば作曲家の名前を壁に貼る。写真やCDジャケットの模型を添えるのもいいかもしれない！

2．クラスで録音を再生し、次のような質問をする：この作品は何についての作品ですか？ストーリーがありますか、それとももっと抽象的ですか？作曲家は何を意図していたのでしょう？

　レコーディングの出来は？　クリアなのか、こもっているのか。見落としはなかったか？　どうすればもっと良くなったのか？　演奏者と演奏についてどう思うか？

3．彼らはどんな楽器や声を使ったのだろうか？

4．彼らは時間を守っていたのだろうか？

その言葉が聞こえましたか？

始まりと終わりはぴったり一緒でしたか？

それはその曲の中でうまくいっていましたか？

作品は長すぎますか／短すぎますか？

何が発展する可能性があるだろうか？

子どもたちは、書評を書くようにノートを書き上げる。

（*Kickstart Music 3*, p.14.）

このような活動を通して、子ども達は他の児童が作って演奏した作品の録音を聴いて批評的観点で分析し、始まりと終わり・発展する可能性のあるモチーフ等、聴いて形式を捉えながら音楽理解を進めていく。このような鑑賞と批評が結びついた観点は、MNCにかつて「聴取及び評価（Listening and Appraising）」という領域が存在していたことが根底にあると考えられる。

（2）「リズム」単元における発展性

KS2：9－11歳　活動を通した「作曲」「聴取」「演奏」による「形式」の理解

【リズムの層】

ねらい：規則的、不規則的なリズムのパターンを見つけ、内的ビート（拍）を発達させる。

準備物：様々な楽器、数字の表

1．3人の子どもたちが、一定の拍子に合わせて1～8を数える。必要であれば、子どもたちが数を数えている間、教師は太鼓を優しく叩く。あるいは、オンラインメトロノームを使う。

2．Aラインを見てみよう。全員が繰り返しそのラインを言うが、丸で囲んだ数字にだけ拍手をする。拍と手拍子がしっかりできるまで練習を続ける。

他のライン（B-F）を通して活動する。もっと難しいラインもある？　どれ？

子どもたちに、連続して手拍子ができる、あるいは少し難しいと思うラインを個別に選んでもらう。子どもたちは、自分の選んだラインに従ってグループに分かれる。

　リズムの層を重ねる。グループ1は自分たちのリズムでプレーし、それを維持する。そ

表 1　Kickstart Music の単元と目的

	聴　取	リズム	歌　唱	探　求	創　作
3-5歳	• 子どもたちの音に対する意識を高める。 • 注意深く聞き、応答する力を養い、子どもたちが進んで順番を守れるようにする。 • 非常に小さな音や、聞き分けるのが難しい音を聞き分ける能力を養う。 • 声のトーンに注意深く耳を傾けて、他の子を識別する。 • 順番を守り、他者と協力することを奨励する。 • 子どもたちに、自分に向かって演奏される音楽を感じ、集中力を養う機会を与える。 • 注意深い聴き方を身につける。 • 音を聞き分け、音楽の語彙を増やす • 体の動きで音に反応し、高い音と低い音の識別を促す。 • 演奏時の注意力とコントロールを養う。	• アクションソングを通してビート感を養う。 • シンプルなリズムを模倣する。 • ビート(拍)の感覚を養う。 • 子どもたちの名前を呼び、テクスチュアを築き、交代を促すシンプルな挨拶／数え歌。また、安定した楽器の割り当て方法にもなる。 • 子どもたちの協調性とリズム感を養う。 • 小節の中のビートを意識し、規則正しいビート（拍）を感じる。 • 簡単なリズムを唱えて、演奏する。 • 簡単なリズムを演奏する。 • リズミカルに動き、唱える。 • 唱え、手を叩き、簡単なリズムを演奏すること。	• 子どもたちが上手に歌う方法を身につけるのを助ける。 • 声の音色を探求する。 • 簡単な挨拶やアクションソングを通して子どもたちの歌声を育て、ソロで歌う理由を与える。 • 高い音と低い音を識別し（歌うときに理解することが重要）、体の動きで音程に反応する。 • 子どもたちの声の高さをコントロールする能力を伸ばし、音程の違いを意識できるようにする。 • 独唱を奨励する。 • 歌の中の一節をソロで歌う。 • 歌の中のソロの部分を歌う。 • エコー・ソングでレスポンスに参加する。 • 数のつみあげうたへの参加を促す。	• 声の音色を探求する。 • 手や足を使って音を出し、体の音を探る。 • 音を探求し、音について語る。 • パーカッションの様々な音、様々な演奏方法を見つける。 • 様々な音を認識し、区別する。 • 楽器が様々な音を奏でることを理解し、技術的な語彙を身につける。 • 曲に合わせて演奏し始める。 • パーカッションの演奏方法を探求する。 • 子どもたちに簡単な即興演奏のスキルを身につけさせる。 • 曲に合わせて適切な音を見つけ、コントロールしながら演奏する。	• 注意深く耳を傾け、紙に音を記録する簡単な方法を見つける。 • 子どもたちに、音楽の物語に音程を取り入れるよう促す。 • 音楽のシークエンスとパターンを発展させる。 • さまざまな音の組み合わせを探求し、スタート／ストップの合図に従う。 • ボーカル・サウンド、インストゥルメンタル・サウンド、周りの音を探求しよう。 • シンプルなメロディーを創る • 物語に声や打楽器の音を加える能力を養う。 • 簡単なスコアに従い、適切な場所でスタート／ストップする。 • 音を単純なパターンに構成する。 • 音と文字を関連付ける。
KS1 5－7歳	• 順番を守ることを奨励し、楽器やサウンドメーカーを使い始める。 • 集中力、静寂、そして静かな音に耳を澄ます能力を高める。 • 子どもたちが様々な音を識別し、その起源や質について話し合う機会を提供する。 • 音楽の記憶力と集中力を養う。 • 異なる音質を聞き分ける能力を磨く。 • 非常に小さな音や、聞き分けるのが難しい音を聞き分ける能力を養う。 • 動きに対する慎重で正確な反応を促す。 • 動きを通して、注意深く耳を傾け、正確な反応を促す。 • 可能な限り幅広い音楽を子どもたちに体験させ、それに触れさせる。 • 子どもたちが聞いたことを繰り返したり、再現したりする機会を提供することで、聞く力を磨く。 • 簡単なウォームアップ練習で、異なる声質や音質を識別する機会を提供する。 • 子どもたちが音楽に対する感情を探求することを促す。	• 順番待ちを奨励し、リズムに正確に反応する力を養う。 • ビート（拍）への反応と、リズム・パターンを正確に思い起こす力を養う。 • 子どもたちの内なるビート（拍）感覚と、頭の中で聞く能力を養う。 • 長い音と短い音を聞き分け、音楽的な記憶とリズム感を養う。 • リズミカルなビート（拍）に対する子どもたちの身体的反応を発達させる。 • 小節の中のビートを意識し始め、規則的なビート（拍）を感じる。 • 子どもたちのリズム記憶力を養う。 • リズムとビート（拍）の感覚を強化する。 • 子どもたちの時間を守る感覚を強化し、リズムを書き留める技術を導入する。 • しっかりとしたリズムコントロールと理解力を身につける。 • 楽器を媒体として、子供たちにリズムの実験を奨励する。 • リズミカルなビート（拍）を刻む能力を養い、同時に複数の活動に取り組む際の集中力を高める。 • リズミカルなビート（拍）を強化し、身体活動のために身体を温め、楽器演奏のための協調性を高める。	音　程 • 歌ったり音源として活用したりする前に、声が適切にウォームアップされていることを確認する。 • 子どもたちの歌唱における音程の正確さを向上させる。 • 子どもたちが想像力豊かに楽器や声を使えるようにする。 • 楽曲がどのように発展し、書き記されていくのかについて、子どもたちの理解を深める。 • 子どもたちにピッチの変化を聴き取るよう促す。 • ピッチのレベルを聴き分ける精度を高める。 • 2つのコードを使って、子どもたちの和声の理解を深める。 • ペンタトニックスケールを使って、子どもたちの名前をリズムにした曲を作る。 • 音程を正確に歌い、聞き取る力を養う。 • 子どもたちが和音を付けて歌える方法を増やす。 • 子どもたちが歌の伴奏の方法を広げることができるようにする。 • 子どもたちに、書かれた音程記号を識別し、演奏して応えるよう促す。 • 発声筋肉を温め、ディクションやピッチの認識を向上させ、声を使う準備を整える。	音と創造力 • 子どもたちに、音楽を作るのに使える音を認識させる。 • 様々な音源からの音の探求を促す。 • 一つの音源から様々な音が出る可能性を子どもたちに探らせる。 • 即興演奏のスキルや演奏のコントロールを身につける。 • 子どもたちに、自分で作った音や音楽のアイデアを記録する方法を見つけるよう促す。 • 子どもたちに、物語の刺激を使って音の実験をするよう促す。 • 短い音の並びを考案し、書き留める。 • 絵の刺激に反応して音を出す実験を子どもたちに促す。 • より多くの音源を探求し、アイデアをシーケンスにアレンジする機会を提供することで、子ども自身の作曲への早期のステップを踏み出す。 • 与えられた構造の中での探求と創作を促し、拡張された楽曲を創作する。 • 音の種類を増やすことで、音を聞き分ける能力を伸ばす。 • 音の質やダイナミクスに耳を傾けることを促す。 • 音楽創作に使用する追加サウンドのライブラリを開発する。

KS2 7－9歳	• 短い曲を模倣し、再現する能力を養う。 • 注意深く聴くことによって、音の質を識別することを奨励する。 • 音の連なりを通して音楽的な記憶力を養う。 • 子どもたちの注意深いリスニングの経験を伸ばす。 • 異なる音を識別し、順序を記憶する能力を磨く。 • 子どもたちに、その質や色に注意深く耳を傾けるよう促す。 • グループで話を聞き、答える機会を提供する。 • 音楽について話し、理解するための専門言語を開発すること。 • 音楽を聴く際の自由な想像力を促し、音楽をムード、色、音色（音質）に分類する。	• 休符の効果を感じ、理解する能力を養う。 • リズムを変化させながら、規則正しいビート（拍）を刻む能力を養う。 • リズムとビート（拍）を組み合わせ、他の人たちの中でパートを保持する能力を養う。 • 子どもたちにリズムを創意工夫して使うことを奨励する。 • 歌の伴奏としてのリズムの使い方を身に付ける。 • リズミカルなフレーズを繰り返す能力を伸ばし、リズミカルな自主性を養う。 • 音声リズムを使って曲を創作するスキルを身につける。 • しっかりとしたリズムコントロールと理解力を身につける。 • 歌の伴奏としてのリズムの使い方を発展させる。	• ピッチの変化に即座に反応することを促す。 • 子どもたちに、異なる音程とパターンの音を識別するよう促す。 • 子どもたちに歌ったり、演奏したり、異なる音程の音符を書き留めたりすることを促す。 • 子どもたちが音程を注意深く聴き、さまざまな音程の音符を創造的に試すよう促す。 • 子どもたちにペンタトニックスケールに慣れ親しんでもらい、それを使って音楽を創作できるようにする。 • 伴奏としてコードを使うことを早期に経験させる。 • 子どもたちに、歌に簡単な和声伴奏をつけることを促す。 • 子どもたちが知的で批判的な態度で歌に取り組むよう促す。 • 楽譜を書くときに簡単なハーモニーを使うことを子どもたちに促す。	• 気分に合わせて適切な音を選ぶ能力を向上させる。 • 言葉、絵、音楽の表現力を組み合わせることの効果を子どもたちに理解させる。 • 子どもたちに、言葉と音の表現力を一致させるよう促す。 • 子どもたちがメロディーを見直し、洗練させるよう促す。 • 子どもたちに、表現力豊かに声を使うことを奨励する。 • 子どもたちが自分の音を紙に記録し、後で参照できるようにする。 • アンサンブル能力の向上。 • 作曲の様々な方法についての研究を深める。
9－11 歳	• 多くの音の中から特定の音を、その音質（音色）によって識別し、探し当てる能力を養う。 • 子どもたちが特定のリズムを識別し、それに反応できるようにする。 • 子どもたちに音を探求させ、視覚的シンボル、形、色、線と音の関係を発展させる。 • 聴く力を養うためにテクノロジーを活用し、子どもたちの音楽を録音・編集する。 • 子ども用食品、自動車、チョコレート、香水など、さまざまなスタイルや製品を紹介する有名な広告の抜粋を、おそらくインターネット経由で録音する。 • 子どもたちの聴く力と音楽的記憶力を伸ばす。 • 音楽を耳で聴いて演奏する方法を子どもたちに身につけさせる。 • 子どもたちの集中力を高め、注意深く耳を傾ける力を養う。 • 子どもたちの集中力を高め、注意深く耳を傾ける力を養う。音や記号を使うことへの意識を高める。 • 子どもたちの作品の記録を学習活動として活用する。 • 子どもたちのリスニング・スキルを向上させ、洗練させる。	• ドラム、キーボード、その他の楽器演奏のための子ども達のコーディネーション技能を養う。 • 子供たちが言葉やリズムを試してみるよう促す。 • リズムパターンを読み、演奏し、書く能力を養う。 • リズムとメロディーに言葉を合わせる。 • 規則的、不規則的なリズムのパターンを見つけ、内的ビート（拍）を発達させる。 • 子どもたちのリズム記憶と創造力を伸ばす。 • 子どもたちのビート（拍）を保つ能力を伸ばす。集中力を高める。 • 子どもたちのリズムの調整力を発達させる。 • 子どもたちのリズムの調整力と音楽への反応をさらに伸ばす。 • リズムの中でメロディックに即興演奏できるようにする。 • しっかりとしたリズムコントロールと理解力を身につける。 • 歌の伴奏としてのリズムの使い方を発展させる。	• 歌ったり音源として活用したりする前に、声が適切にウォームアップされていることを確認する。 • 子どもたちの歌唱における音程の正確さを向上させる。 • 子どもたちが想像力豊かに楽器や声を使えるようにする。 • 楽曲がどのように発展し、書き記されていくのかについて、子どもたちの理解を深める。 • 子どもたちにピッチの変化を聴き取るよう促す。 • ピッチのレベルを聴き分ける精度を高める。 • 2つのコードを使って、子どもたちの和声の理解を深める。 • ペンタトニックスケールを使って、子どもたちの名前をリズムにした曲を作る。 • 音程を正確に歌い、聞き取る力を養う。 • 子どもたちが和音を付けて歌える方法を増やす。 • 子どもたちが歌の伴奏の方法を拡げることができるようにする。	• 詩を刺激として、雰囲気のある／表現豊かな音楽の作曲を探求する。 • 音楽のパターン作りにおいて、体の音や様々な簡単なサウンドメーカーを使うことを強化する。 • 子どもたちが海の作品を作曲できるようにする。 • 子どもたちが様々な感情を伝える音楽を探求し、創造できるようにする。 • 子どもたちに、さまざまな特徴を探求するよう促す。 • 音がどのように作られるかを探求し、理解できるようにする。 • 子どもたちに、音楽を通じてさまざまなムードを探求するための簡単な装置を提供する。 • 音楽がどのように組み合わされ、音楽的アイデアのパターンとして構成されているかについての理解を深める。 • さまざまなタイプの音源を調べ、探求する。 • 子どもたちに、自分の作品を刺激として作曲の経験を積ませ、子どもたちの音楽経験のあらゆる要素を統合する。

の後、グループ2が加わり、グループ3が加わり……といった具合だ。

最後に、非常に静かな太鼓のビートだけ（カウントグループなし）で試してみよう。子どもたち全員が頭の中で数える必要があるように。

〈発展〉

これをピッチのある楽器とない楽器で試してみよう。ピッチのある楽器は、非常に興味深いハーモニーを生み出すことができる。より発展的な作品を作るために何度も演奏しよう。子ども達は自分たち独自のリズムラインを創る。子どもたちは、ライヒの"Clapping Music "を見て、自分たちの作品を比較するかもしれない。

（*Kickstart Music 3,*, p.20.）

ここでは、リズムを手拍子で打つことから楽器の演奏に移ることによって、無理なく一定のテンポ感をキープすることができる。「発展」においてミニマルミュージックの現代音楽作曲家であるライヒ（Reich, S.）の作品の鑑賞と、子ども達自身の音楽づくりと演奏とが統合される。これはペインターとアストン（1970）による*Sound and Silence :Classroom Projects in Creative Music*（山本文茂・坪能由紀子・橋都みどり共訳『音楽の語るもの』）において、子ども達のグループでの作曲から同じ技法を用いた現代音楽作品の鑑賞をするプロジェクトの構成と同様である。

（3）「歌唱」「音程」セクションにおける音楽理解

①Early Years　3－5歳 「歌唱」の活動を通した「演奏」「聴取」「作曲」による「音素材」の理解

【エコー】

ねらい：エコー・ソングでレスポンスに参加する。

1．「フレール・ジャック」[1]に合わせて歌われる有名な歌「雷が聞こえる」を学ぶ。

2．これはエコー・ソングの良い例だ。リーダーが各セリフを歌い、それを子どもたちが繰り返す。

〈コール／リーダー〉	〈エコー／子ども達〉
「雷が聞こえる」	「雷が聞こえる」
「ハーク、そうだろう？」	「ハーク、そうだろう？」
「ポツポツ雨粒」	「ポツポツ雨粒」
「びしょ濡れ」	「びしょ濡れ」

3．子どもたちが自分で返事をするように促すが、子どもたちが嫌がるようであれば、あなたや他の大人が一緒に静かに歌ってもよい。

4．いったん曲ができたら、子どもたちは例えば各フレーズの終わりに効果音を加えることができる。

例：「雷が聞こえる」――ドラム、タンバリンをとても大きな音で、

「ハーク、そうだろう？」――ドラム、タンバリンをとても小さな音で

「ポツポツ雨粒」――チャイム・バー、トライアングル、ベル、チューニングされたパー

1　日本での曲名は「グーチョキパーでなにつくろう」。

カッションの音
など、チャイムやベルの音をたくさん
「びしょ濡れ」――ジングルベル、マラカス、カスタネット、タンバリンなど、たくさんの楽器を振る。

5．クラスを分けて、1つのグループが効果音を出し、他のグループが歌う。
（*Kickstart Music Early Years,* p.43）

この活動では、リーダーの歌を聴いて模倣し、各フレーズの終わりに効果音を加えるという作曲と演奏に加わり、効果音という形で楽器を音素材として探求し、様々な創造的表現へと向かう。

KS2：7－9歳 「音程」の活動を通した「聴取」「作曲」「歌唱」による「表現」「形式」の理解
【魔法の牛乳瓶】
目的：子どもたちが音程を注意深く聴き、さまざまな音程の音符を創造的に試すよう促す。

1．クラスで話し合いながら、7本のボトルの底に少量の食用色素を落とし、1本は空にしておく。
2．ボトルを一列に並べる。最初の瓶以外の着色料の入った瓶に、ビーターで音を注意深く確かめながら、少しずつ水を加えていく。ドー、レイ、ミー、ファ、ソー、ラ、ティー、ドーというように、音階が上がっていくはずだ。「サウンド・オブ・ミュージック」の歌のように。
3．各ボトルの水位上部にマーカーペンで印をつける。

〈発展〉
- 最高音と最低音を見つける。
- 曲を作る（繰り返しが効果的であることを忘れずに）
- 友達と音楽の対話をする。
- 順番を覚える－ある人が演奏し、別の人が繰り返す。
- 思いつきでも発見したものでも良いので、曲を書き留める方法を見つける、例えば、「フレール・ジャック」など：

（*Kickstart Music 2,* p.46）

ここでは液体の量によって音程ができることを音を出して聴くことによって「音素材」を味わい、その手作り楽器を用い友達と「音楽の対話」を表現することによって「表現」を伝え、独自の方法で記譜することに繋がる課題が挙げられている。

（4）就学前「探求」小学校「音と創造力」単元における音楽理解

①Early Years：3-5歳「探求」の活動を通した「演奏」「聴取」「作曲」による「音素材」の理解
【一つの音が聴こえる】
目的：曲に合わせて適切な音を見つけ、コントロールしながら演奏する。
歌：「フレール・ジャック」の曲で「I hear one sound」を歌う

1．みんながその曲をよく知っているようになるまで学ぶ。
2．　5まで数える数を決め、5人の子どもにそれぞれ楽器を渡す。そして、子どもたちに1番から5番までの番号をつける。
3．子どもたちは順番に、自分の好きな音で歌の伴奏をする。1番の子は、最初の歌詞「I hear one sound」を歌っている間、楽器を演奏する。他の奏者は、自分の番号の歌詞が歌われるまで楽器を鳴らさない。子どもたちが曲に合わせて演奏できるように手助けしてみよう。
4．簡単な数え方のルールがある他の歌も試してみよう。例えば「10本の緑のビン」など。各物体が消えるにつれて、楽器で音を出す。例えば、「そして、もし緑のビンが1本、誤って落ちてきたら（シンバルの上でクラッシュ）、……緑のビンが9本になる……」。
（*Kickstart Music Early Years*, p.54.）

ここでは5つの数字の概念を学ぶと共に、歌詞をよく聴くようになる。好きな音で伴奏することにより音素材を探求することができる。

②KS2：9－11歳「音と創造力」の活動を通した「聴取」「作曲」「演奏」による「形式」の理解
【学校展覧会】
目的：音楽がどのように組み合わされ、音楽的アイデアのパターンとして構成されているかについての理解を深める。
　活動を始める前に、子供たちにムソルグスキーの「展覧会の絵」の録音から抜粋したものを聞かせる。

ムソルグスキーの作品が、美術展の中を歩く様子をどのように表現し、どのように構成されているかを説明しなさい：
プロムナード－写真A、プロムナード－写真B、プロムナード－写真C
　例えば、プロムナードと2枚の写真など、3つのセクションの抜粋を聴いて、プロジェクトの内容を把握する。
子どもたちを最大5人のグループに分ける。各グループは、自分たちの作品の中から、音楽で表現する絵画／ドローイングを選ぶ。
1つのグループを選び、すべての音楽の絵をつなぐ「ウォーキング・ピース」を作曲してもらう。
各グループで話し合い、必要な楽器や音源を選ぶ。彼らはまず、それらの資源の可能性を探る。その後、彼らは自分の絵を説明する30秒の作品の構成に取り組む。以下のいくつかの活用を奨励する：
- 繰り返されるパターンが面白い。
- 音符とフレーズの並び。
- 上記の繰り返し。・音の層、同時に進行する複数のアイデア。
- コントラスト-大きい／小さい、速い／遅い、暗い／明るい、スタッカート／レガート。

（*Kickstart Music 3,* p.60）

ここでは、楽曲の聴取→視覚的イメージと構成の把握→楽器や音源を演奏してみながら音素材としての可能性を探る→音楽の構成要素に基づいた作曲技法に基づいた創作、という形で聴取・演奏・創作による音楽理解を深める仕組みとなっている。日本における「展覧会の絵」の鑑賞の指導案では、組曲の標題と絵を繋げる活動がよく見られるが、ここでは特に標題を知らせることなく抜粋を聴かせ、写真と「プロムナード」の並びからまず構成を把握する。「音と創造力」を育むセクションであり、音楽的アイディアのパターン、構成の理解が目的であるため、最初から創作を見据えた聴取の活動となっている。それによって、子ども達が5人のグループで協力しながら、創造的に音楽の構造を理解することができる。

3．綜合考察

分析の結果、単元名に関わらず、各単元に作曲・聴取・演奏の活動によって音楽理解を深める構造が見られた。就学前３－５歳では「素材」の段階であり、小学校KS1の5－7歳では「表現」の理解へと向かう。学年が上がるにつれそれぞれの年齢段階において様々な習熟度の子ども達がいる前提で、最終段階の「形式」の理解まで見通してそれぞれの発達段階に合った活動を到達段階として累積的にあてはめることが可能になる。

*Kickstart Music*の単元構成は、全てのセクションを通じてスワニックの示した音素材・表現・形式の理解へと繋げることが可能である。そして各年齢段階において多様な子どもがそれぞれの習熟度に応じて音楽を理解し、他の子ども達との活動を通じて楽しむことができる構造となっている。

そして楽曲による題材構成ではないことが大きな特色である。楽曲は必要に応じて示されているが、楽譜そのものはほとんど見られず、音源のリンク等が示されている。日本の場合、主題による題材・楽曲による題材に関わらず、楽譜が掲載されている。そのため教師はその楽曲を仕上げることが優先となりがちであり、音楽的発達段階を見通してなぜこの楽曲を扱い、今どの段階にあるのかを見逃す危険性がある。*Kickstart Music*のように歌詞と必要なリズム等最低限の情報があり、活動の仕方が示してある以上、子ども達は聴いて感じて表現することができる。記譜が音楽づくりの手段として設定されており、自分たちの表現したい音楽を五線譜以外も含めて記譜することから始まる読譜力は、既成の五線譜を読み取ることから始まる読譜よりも、創造的で発展的となる可能性がある。

最も重要な観点としては、創作のための基礎的技能としての聴取・歌唱・音程・リズム学習の発展性が具体的に示されたことであり、日本の音楽教育における鑑賞・歌唱・器楽が創作の技能にどのように関連づけられ、発達が見込まれているかの示唆となり得る。

【引用・参考文献】

今川恭子（1997）「音楽的発達をめぐる実験研究と観察研究の意義と課題」日本音楽教育学会『音楽教

育学』第27－3号, pp.1-14.
尾見敦子（2012）「なぜ音楽の授業で読譜力が養われないのか――ハンガリーの音楽教科書が語るもの」日本音楽教育学会『音楽教育実践ジャーナル』9（2）, pp.58-66.
川村恭子（2011）「米国の多文化音楽教育における他教科との連携――多文化音楽教育に関する指導計画集及び音楽科教科書を中心として」日本音楽教育学会『音楽教育実践ジャーナル』8（2）, pp.74-81.
木村充子（2007）「演奏指導における『音楽理解』－子どもと指導者との間で相互に作用し合う音・音楽の象」東京芸術大学音楽教育学研究室『音楽教育研究ジャーナル』第27号、pp.1-13.
小松原祥子（2023）「イギリスの就学前・初等音楽教育における音楽の諸要素を軸とした指導法－EYFS2021とMNCに基づいた教科書分析－」神戸女子短期大学『論攷』第68巻pp.13－24.
篠原康正（2016）「イギリス」文部科学省『諸外国の初等中等教育』明石書店、pp.91-129.
高須一（1998）「子どもの音楽づくりと音楽的発達に関する一研究－社会文化的アプローチを通してのSwanwick・Tilman発達モデルの検討と実践的授業分析――」日本音楽教育学会『音楽教育学』第28－1号, pp.6-21.
同上（2001）「小・中学校音楽科教育のための音楽的発達理論とは?」日本音楽教育学会『音楽教育学』31（2-3）,pp.33-42.
竹井成美（1995）「音楽科教育における即興表現・創作の試み――Keith Swanwickの『音楽的発達の螺旋型モデル』図を生かした、中学校における即興表現・創作を中心として――」日本音楽教育学会『音楽教育学』第25－3号, pp.1-15.
藤掛絢子／北野幸子／三村眞弓（2014）「音楽領域における幼小接続カリキュラムの検討――イギリスとアメリカの比較を中心に――」『国際幼児教育研究』2014, Vol.21., pp.17-25.

＊

Boyce-Tillman, J. and Anderson, A.（2022）“Musical development then and now: in conversation with June Boyce-Tillman”, *British Journal of Music Education*, 39, pp.51-66.
Bruner, J.S.（1961）*The Process of Education*, Massachusetts：Harvard University Press.（鈴木祥蔵・佐藤三郎訳（1963）『教育の過程』岩波書店）
Burke, N.（2018）*Musical Development Matters in the Early Years*, The British Association for Early Childhood Education.
Chris Philpott（2022）“The sequence of musical development and its place in Swanwick's meta-theory of music education: a personal response”, *British Journal of Music Education*”39, pp.80-91.
Department for Education（Rivised July 2021）*Development Matters-Non-statutory curriculum guidance for the early years foundation stage*〈https://www.gov.uk/government/publications/development-matters--2〉（最終アクセス2022年9月19日）
Department for Education, *Music programmes of study: key stages 1 and 2 National curriculum in England*, September 2013.
Department for Education（2021）*Statutory framework for the early years foundation stage-Setting the standards for learning, development and core for children from birth to five*, https://www.gov.uk/government/publications/early-years-foundation-stage-framework--2（最終アクセス2022年9月19日）
Hargreaves, D.J.（1992）“Developmental Theories of Music Learning” *Handbook of Research on Music Teaching and Learning*（Colwel, R.,ed）, MENC, pp.377-391.

Paterson, A. and Wheway, D.（2021a）, *Kickstart Music Early Years*（*3-5yrs*）, Dingley: LMP Publications, p.3.

Ibid（2021b）. *Kickstart Music 1*（*5-7yrs*）, p.3.

Ibid（2021c）. *Kickstart Music* 2（*7-9yrs*）, p.3.

Ibid（2021d）. *Kickstart Music* 3（*9-11yrs*）,p.3.

Paynter, J. and Aston, P.（1970）*Sound and Silence : Classroom Projects in Creative Music*, Cambridge University Press.（山本文茂・坪能由紀子・橋都みどり共訳,（1982）『音楽の語るもの』音楽之友社）

Swanwick, K.（1988）*Music, Mind and Education*. London：Routledge.（野波健彦・石井信生・吉富功修・竹井成美・長島真人訳（1992）『音楽と心と教育　新しい音楽教育の理論的指標』音楽之友社）

Swanwick, K.（2022）"Reflections on the sequence of musical development", *British Journal of Music Education,* 39, pp.44-50.

Swanwick, K.& Tillman, J.（1986）"The sequence of musical development: A study of children's composition", *British Journal of Music Education*, 3（3）, pp.305-339.

［付記］本研究は、行吉学園2023年度教育・研究助成費No.2023-36　研究課題「EYFS導入後のイギリス就学前・学校音楽教育における音楽の諸要素を軸としたアプローチ――幼児・初等・中等教育接続の観点から――」の助成金を受けたものです。

【Abstract】

The structure of musical understanding in pre-school and primary school music textbooks in England

— Analysis of *Kickstart Music* (2021) from a developmental perspective —

Sachiko Komatsubara

(Kobe Women's Junior College)

The purpose of this paper is to identify the structure of musical understanding through the units of "Listening, Rhythm, Singing, Exploring, Creation" in the pre-school and "Listening, Rhythm, Pitch, Sounds and Invention" in the primary KS1 (5-7 years old) and KS2 (7-11 years old), using the *Kickstart Music* 2021 revision, a music textbook for the pre-school to primary stages in the England. The reason for the selection of the texts is a clear awareness of the developmental structure. The analytical perspective is "The Developmental Spiral" by Swanwick and Tillman (1986).